

はととりんご

小川未明

青空文庫

ふたり 二人の少年が、竹刀をこわきに抱えて、話しながら歩いてきました。

「新ちゃん、僕は、お小手がうまいのだぜ。」

「ふうん、僕は、お胴だよ。」

「お面は、なかなかはいらないね。」

「どうしても、背の高いものがとくさ。正ちゃん、いつか仕合してみない。」

新吉は、お友だちの顔を見て、にっこりと笑いました。

「まだ、君と、やったことがないね。だが、新ちゃんを負かすと、かわいそうだからな。」

「だれが、正ちゃんに負けるものか。」

新吉は、自信ありげに肩をそびやかして、前方をにらみま

した。

「僕は、新ちゃんに負けない。」

「僕も、正ちゃんに負けない。」

二人は、道の上で、竹刀を振りまわしながら、仕合のまねごとを始めたのです。

「お小手。」

「お面。」

「おや、あぶのうございますよ。」

ふいに、どこかのおばさんが声をかけました。おばさんは、道を

の端はしの方ほうへ体からだをさけていました。

「新しんちゃん、あぶないからよそうや。」と、正しょうじ二じがいました。

「ああ、よそう。」

二人ふたりは、往おうらい来らいで、こんなことをしてはよくないことに気きがついて、ふたたびおとなしく、肩かたを並ならべて歩あるいていました。さつきのおばさんは、いきかけてから、ちよつと立たち止どまって、振ふり向むいて笑わらいました。

「正しょうちゃん、僕ぼくのはと、ねこにとられてしまった。」

「えっ、とられた。」

「どらねこがとつたのだよ。君きみ、知しらない。尾おの長ながい三み毛けねこだ。はとが遊あそびから帰かえって、箱はこのトラップへはいるのを見みていたのだ。

ね。後あとからついてはいつて、二羽わとも食たべてしまったのさ。出でようとしても、トラップの口くちがあかないだろう。ねこのやつ、箱はこの中なかでじつとして、目めを細ほそくして眠ねむっていたのだよ。」

「悪いやつだね。それからどうした。」

「僕ぼく、どうしてやろうかと思おもつて、おねえさんおねえさんを呼よんだのさ。お正しょうちゃんちゃんは、足あしを止とめて、新しんちゃんちゃんの顔かおを見みました。」

「僕ぼく、どうしてやろうかと思おもつて、おねえさんおねえさんを呼よんだのさ。おねえさんも二階かいへ上あがってきて、『悪いねわるこだから、ひどいめにあわせておやり。』というから、僕ぼく、太ふといステッキもを持ってきて、なぐろうと思おもつたのさ。箱はこの中なかから引ひき出だそうとしても、お腹なかが大きいおおくて、トラップの口くちから出でそうもないのだよ。」

新しん吉きちは、そのときのことを思おもい出だして、息いきをはずせました。

「なぐった。」

「だって、箱はこの中なかへはいつているのだろう。上うえからなぐれないし、僕ぼく、困こまったのだよ。」

「ねこは、どうしていた。」

「悪いわるやつだね、目めを細ほそくして、知しらないふうふうをしているのさ。」

「あばれなかつたの。はははは、だまそうおもと思おもったのだね。」と、正しょうちゃんが笑わらいました。

「じつとしているから、おねえさんに箱はこのふたふたをはずしてもらつて、僕ぼくが、なぐつてやろうとしたのだ。」

「なぐった。」

新しん吉きちは、ねえさんが注ちゆう意いしながら、ふたをはずしたのを思おも

い出だしました。そのとき、ねこはあまえるようにして、体からだをねえさんにこすりつけたので、自分じぶんは、振り上げあた手をどうしようかと、ちよつとためらった瞬間しゆんかんに、ねこが矢やのように逃にげ出したので、はつと思おもつて、すぐなぐつたが、ただ、はげしく、ステッキが地面じめんを打うただけでありました。

「打うちそこねて、おいしいことをしたのさ。」

「だめだな、新しんちゃんは、そんなの打うてなくてどうするのだい。僕ぼくなら、きつと、たたき殺ころしてやったのに。」

正しょうじ二は、今こんど度、仕合しあいをしても、自分じぶんは、じゅうぶん勝かてる、といわぬばかりの調ちようし子でありました。

「僕ぼく、あんなやさしいねこの姿すがたを見みなければ打うてたのさ。」

日ひごろ、犬いぬやねこをかわいいがる新吉しんきちは、まったく、そのとき、
手てもとがくるつたのであります。

「だめだなあ、敵かたきを討うつとき、かわいいそうもなんにもないだろう
。」と、正二しょうじがいました。正二しょうじのいったことは、たしかに、
新吉しんきちを深く考ふかえさせました。

「だが、ねこは、鳥とりをとるのを悪いわると思おもっていないだろう。」
君きみ、はどのほうが、よっぽどかわいいそうだろう。」

「それは、そうだ。」

「みたまえ、箱はこの中なかはどんなだったい、血ちだらけでなかった。」
「ああ、血ちがそこらについて、毛けが散ちらばっていた。」

「それなのに、君きみは、はどの敵かたきを討うつのに、かわいいそうだななんて

おも
思つたのか。」

しょうじ 正二は、しんきち 新吉をなじりました。しんきち 新吉は、じつと下を向い

ある て歩いていました。そして、つくづくと自分の勇気がなかつたの
かん を感じ、ねこをなぐらなかつたのを後悔しました。

こうさてん 交叉点のところへかかると、まだ、あおあか 青赤の信号燈がまにあ

わぬとみえて、ばたんばたんと、ゴーストツの機械をまわして、
みは 見張りの巡查がピリツピリツと、そのたびに笛を鳴らしていま
した。

あか ばたんと赤が出ると、一方からくる車がみんな止まって、いま
くるま まで、じつとしていた車が、なが 流れるように続きました。また、ば
きかい たんと機械がまわって、ピリツピリツと鳴ると、ゴウツと走って

きた車が急に止まって、止まっていた車が走り出すのです。台上に立つて、ピリツピリツと笛を鳴らすおまわりさんは、あるときは、やせて背の高い人のこともあれば、ときには、太って腹つき出した赤ら顔の人のこともありました。

今日きようは、その太ふとったおまわりさんで、胸むねを張はつて、元氣げんきよく合あ図いずをしていました。

ピリツピリツと笛ふえが鳴なりました。このときと思おもつて、二人ふたりがあちらへ道みちを横切よこぎつていきかかると、

「おい、君きみ。」と、おまわりさんは、後ろうしろから、二人ふたりを呼よび止とめました。新吉しんきちも正二しょうじも、びつくりして、おまわりさんの方ほうを見返みかえりました。

「ちよつと、きたまえ。」と、おまわりさんは、大きな声でいいました。

あちらの歩道を歩いていている人たちまでが立ち止まって、なんだろうと、こちらを見たのです。

「僕たちは、なにをしかられるようなことをしたろうか。」

二人は、顔を見合ったが、おまわりさんが手を上げて招くので、その前へいききました。その間も、おまわりさんは休まずに、ばたばたと機械をまわしながら、ピリツピリツと笛を鳴らししました。そして、一方からくる車は、それによって、ゴウツと走り出し、一方からくる車は、それによって、ぴたつと止まりました。おまわりさんは、いつもここを通る二人の顔を知っているとみ

えて、

「いま帰かえるのか、おそいな。」といいました。なるほど、短みじい冬かふゆの太たい陽ようは、もう西にしにかたむきかけていました。

「撃げ剣けんのおけいこをしてきたのです。」と、正しょうじ二にが答こたえまし
た。

「君きみ、それで、ひとつ、この小僧こぞうを打うつてくれ。」と、おまわり
さんは、わきを振ふり向むきました。二人ふたりは驚おどろいて、そちらを見みると、
かごを自じてん転しゃ車やに乗のせた小僧こぞうさんが、じつとして立たっていました。
(きつと、合あ図ずを見みないで、走はしり抜ぬけようとしたのだ。)と思おもい
ました。

「ひとつ、うんと打うつてくれ。」と、おまわりさんは、今こんど度ど、新し

んきち ほうむ なお
吉の方に向き直つていいました。

ぼく
「僕、いやです。」と、新吉は答えました。

ゆる
「許しておやりよ。」と、正二が、おまわりさんの顔を見上げ
ていったのです。

「いや、一つ打てば許してやる。それでなければ、一時間も立た
せておく。」

き
これを聞くと、正二は、一時間も立たされるのは、かえつて
こぞう
小僧さんを苦しめることだから、（打とうかな。）と考えました。
かれ
彼は、竹刀を持ち直して、小僧さんの方を見たのでした。早く
もそれを知った新吉は、

「えいつ。」といつて、正二の顔を自分の竹刀で、一つ軽くた

たいて、あちらへかけ出だしました。

「やったな。」と、正しょうじ二あたまは頭をおさえて、すぐに新吉しんきちの後あとを

追おいかけました。おまわりさんは、大おおきな腹はらを抱かかえるようにして、

「わっ、ははは。」と笑わらいました。止とまった車くるまから見みている人ひとた

ちまで、こちらを見みて笑わらいましたが、ピリッピリッ、ぎい、ばた

んばたんと機きか械がいがまわると、もう一しゅんかんま瞬ま間え前まへのことは忘わすれて、

みんな走はしり出だしました。二ふたり人の少しょうねん年すの姿すがたは、見みえなくなつて

しまったのでした。そのつぎのピリッピリッを鳴ならし、機きか械がいをま

わすと、巡じゆんさ査さは、

「これから気きをつけろ。」と、小僧こぞうを許ゆるしてやりまさした。小僧こぞうは、

幾いくど度も頭あたまを下さげて、ほかの車くるまといいっしよに走はしり去さりました。

町からはなれた野原のほらの草くさは、毎夜まいよふ降る霜しものために、黄色きいろく枯かれて
 いました。新吉しんきちは、一人ひとり、道みちの上うえで、夕焼ゆうやけのうすれた西にしの
 空そらをのぞんで、雪ゆきのきた、遠とおくの山やまのけしきをながめていました。
 すきとおるような空そらの色いろは、ちようど冷つめたいガラスのように、無む
 限げんにひろがっています。そして、刻々こくこくと紫むらさきいろに山やまの姿すがたが変か
 わつていくのでありました。

彼かれは、じつと目めをこらして、うす紅べにいろ色の空そらから、二羽わのはと
 が、いまにもぽつんと黒くろい点てんのようにあらわれて、こちらへかけ
 てきて、だんだん大おおきくなるような気きがしたのです。

けれど、いつまでたつても、それはむなしいのぞみであつて、
 なつかしい影かげは、あらわれませんでした。

「正ちゃん（しょうちゃん）のいったように、あのとき、ねこをひどいめにあわせてやるのだったな。」

「帰らぬ（かえ）ことを思（おも）っていると、チリチリチンと鈴（すず）の音（おと）がして、八百屋（やおや）の小僧（こぞう）さんが、やさいを乗（の）せて、自転車（じてんしゃ）を走（はし）らせてきました。そして、新吉（しんきち）の前（まえ）を過（す）ぎるときに、ふと小僧（こぞう）さんは、こちらを向（む）いて、かごの中（なか）から、一つ紅（あか）いりんごを取（と）り出して、新吉（しんきち）の立（た）っている足（あし）もとの草（くさ）の上（うえ）へ投（な）げていききました。」

「はつと思（おも）って、新吉（しんきち）は見送（みおく）ると、小僧（こぞう）さんは振（ふ）り返（かえ）りながら、手（て）を上げ（あ）げてしっけい（しっけい）をしました。」

「あつ、さつきの小僧（こぞう）さんだ。小僧（こぞう）さん。」

すでに自転車（じてんしゃ）は遠（とお）くなくて、こちら（こちら）を向（む）く顔（かお）だけが、白（しろ）く見（み）

えました。新吉しんきちは、りんごを拾ひろい上あげると、につこり笑わらつて、
その冷つめたい紅あかいくだものを自じ分ぶんのほおに押おしあてて、あくまで、
北きた国くにの畠はたけに生うまれた、高たかいかおりをかごうとしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「鳩とりんぼ」新潮社

1940（昭和15）年12月

初出：「日本の子供」

1940（昭和15）年1月

※初出時の表題は「鳩と林檎」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

はととりんご

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>